

# シク教の祈り(3) 祈りの本質



司俊研研究会員 坂任方東専保

前回まで、ヒンドゥー教とイスラーム教の祈りの形式について比較検討しました。しかし、このような形式的な比較が宗教的な祈りの本質を知るのにどれほど意味があるか、と思われた方も多いかったのではないでしようか。

たしかに、これまで試みてきた形式的な比較というものは、それだけでは單なる知識の遊び的な次元に止まるものです。しかし、このようないい處は宗教というものの存在が多岐に亘つてゐる以上、基本的理解のためには不可欠でもあ

ります。と同時に、それだけでは真に宗教的な意味での祈りを理解すること、少なくともシク教の祈りを理解するには十分ではありません。というのも、祈りというものは宗教的な形式であると同時に、内面的で、精神的な行為でもあるからです。つまり、極めて個人的な感情の世界の中に見え隠れする祈りの本質というものは、本来他人や他者の介在を許さない個人的な閉ざされた世界に根ざす部分が多いからです。一般に祈りとは、個人と神（超越者あるいは

超越的存在)との何らかの交流を意味しています。『哲学事典』によれば「神へ心をむけ高揚する一切のことを意味している。あるいは總じて神との人格的交流と考えられる」ということになります。

そして、この神との交流がすでに述べたようにヒンドゥー教では極めて呪術的であり、人間主体の信仰形体となり、一方、イスラーム教はといえば、神を中心の信仰形体をとるということになります。では他に、神と人間との関係はありえないのでしょうか。つまり、人間と神との関係において、どちらにも偏らない関係です。あるいは言葉を替えれば、神と人間が相即不二の関係となるということです。具体的に言いますと、人間が神と一体化する関係ということです。

超越的存在である神とその被造物である人間とが一体となるという考え方には、一般的には神秘主義思想と呼ばれています。この考え方につ

いての詳しいことはいずれ紹介しますが、この神秘主義思想が祈りとことの本質を最も典型的に表しておりますので紹介したいと思います。

### 超越者(神)と人間との合一

この神と人間<sup>が</sup>一体化するという考え方には、インドの精神伝統の中に存在しましたから呪術的傾向の強いヒンドゥー教の中でも、独特の發展をしていました。特に、中世インドではバクティと呼ばれるヒンドゥー神秘主義思想とその信仰形態が広く普及していました。ところが、絶対的超越的神の存在を中心に置くイスラーム教ではそう簡単に話は運びません。なぜなら「絶対的超越者である神と、その被造物にすぎない人間<sup>と</sup>がどうして融合・あるいは合一できるのか」という、深刻な神学上の問題が、イスラーム教にはあるからです。それは、イスラーム教

では神を余りに高く、しかも絶対的な存在とみなしているからです。しかし、この観点に立ちますと、神が民衆から離れすぎてしまい、神の存在が民衆にとつては希薄なものとなってしまいがちです。勿論「それだからこそ神なのだ」と納得できる人も多かつたのですが、そうでな

い人も沢山いました。そのような傾向は、元来神秘的な思想を好む傾向があつたペルシヤ人に多く出現しました。ペルシヤを中心に出現した一連の民衆思想家が、この難問題解決に宗教的情熱の全てを傾けました。これが世に言うイスラーム神秘主義者スーアーとその思想です。実



はこのイスラーム神秘主義思想家スーアーの存在こそ、最も典型的な祈りの形態なのです。それは、ヒンドゥー系の諸宗教のように呪術的な要素を殆ど持っていないためです。その意味は、すでに紹介したとおりです。

このスーアー達の祈りに対する純粹で真剣姿勢が、本来極めて宗教的なインドの人々の心を大いに動かしました。8世紀以来、インドは徐々にイスラーム化してゆきますが、その殆どは、スーアー達の宗教性の高さに感動した人々の自主的な改宗によつたということです。例えば、12世紀ころのスーアー達は「持てるものは只そ身体を覆うにも不十分な布一枚であつたとか、彼の財産といえばたつた一枚の木製のドア一枚であつた」とか伝えられるように、極めて質素な生活をしていました。しかし、その心は非常に高く、その精神の純粹性はイスラーム教徒は勿論、ヒンドゥーの人々まで引付けて止

まなかつたと言います。この中には多数の仏教徒が含まれています。

さてスーアーの基本は、神への絶対的な帰依と並んで、誠心から祈りを捧げることによって形成されました。彼らは神の慈悲を信じ、神の愛に包まれているという確信をもつて生活しておりました。ですから、この世の一切の不都合に関してはまったく意に介さなかつたのです。そして、この神の愛にすがることで、人間は神と合一できるのだと考えたのです。この神の愛による合一体験、即ち神への祈りこそが、スーアーが希求する祈りの帰結なのです。この究極的な目的のため、言い替えればこの神との合一という神秘体験をとうして、スーアーたちは、ヒンドゥー教という違つた神の体系と信仰形態を持った宗教と精神的な共有部分を形成していました。この点に関しては次の機会に譲ることにします。